

NEXT CONCERTS

>> 次回東京定期演奏会

第 **752** 回

サントリーホール

2023年7月7日(金)19:00開演

8日(土)14:00開演

フレンド・オブ・JPO 広上淳一と取り組むオペラ

助成：文化庁文化芸術振興費補助金  
(舞台芸術等総合支援事業(創造団体支援))  
独立行政法人日本芸術文化振興会

指揮：広上 淳一 [フレンド・オブ・JPO(芸術顧問)]

カニオ：笛田 博昭 シルヴィオ：池内 響

ネッダ：竹多 倫子 ペッペ：小堀 勇介

トニオ：上江 隼人

合唱：東京音楽大学

児童合唱：杉並児童合唱団

レオンカヴァッロ：歌劇《道化師》(演奏会形式)



©Masaaki Tomitor

## 次回東京定期演奏会指揮者にインタビュー!

広上 淳一 編

聞き手 奥田 佳道

「65歳になるので(広上淳一は1958年5月5日生れ)、これまで僕を育ててくれた全国のオーケストラ、お客さんに恩返しをしたいという気持ちが強まってきました。

定期演奏会ばかりでなく、いろいろなところに出かけて、オーケストラを好きになってもらうためのコンサートをもっと指揮したいと思っています。

宮崎国際音楽祭や静岡のグランシップでやっていますが、若い人や子供たちのためのコンサートにも力を入れていますよ。東京音大で教えているからよく分かるのですが、新しい世代の演奏家、歌手がどんどん力をつけています。優秀な若手を紹介したいという気持ちも増すばかりです。

1990年頃にシドニーのオペラハウスで《仮面舞踏会》《リゴレット》を振り、その後はオランダで、日本では藤原歌劇団や日生劇場、関西二期会でオペラを指揮しています。ここ数年は宮崎国際音楽祭でヴェルディやプッチーニに取り組んできましたが、僕はいわゆるオペラ指揮者とは見なされていない。オペラは年に一回程度やりますが、確かにコンサート中心の指揮者です。

オペラとシンフォニーは、あなた(聞き手=奥田佳道)の言うように音楽の両輪で、ぜったい両方やったほうがいい。お互いにいい効果をもたらします。でもリハーサルに

かける時間やシステムが異なるだけでなく、指揮者のテクニックや役割が、オペラとシンフォニーでは違いますよね。

日本フィルとは、これからオペラをコンサート形式で上演するプランがあります。若いメンバーが増えて上手くなった日本フィルに、必ずいい影響を及ぼしますよ。オペラを経験することによって、音楽的な引き出しが増えますし、柔軟性も増します」

2023年7月の定期演奏会に選ばれたのは、1892年5月にミラノのダル・ヴェルメ劇場で初演されたヴェリズモ・オペラ(写実的なオペラ)の傑作、レオンカヴァッロ(1857-1919)の《道化師》全2幕。アリアばかりでなく、オーケストラ、コーラスも主役を演じる烈しくも美しい作品だ。

「パリアッチ(道化師)、初めて指揮します。でもずっと興味を抱いていました。ドロドロしたお話だけど、人間の性(さが)、独占欲、煩惱がこれほど赤裸々に表現されているオペラはありません。

何よりもドラマティックな音楽がいい。音楽がすべてを語っている。なので、初めて聴いた方でも、今何が起きているか、登場人物がどんな気持ちで歌っているかが分かる——そんなオペラです。演奏時間も長くない、コンサートとそれほど変わらない。

まさにヴェリズモ(写実的、現実的)ですね。今回は字幕付きなので細かなやりとりも分かりますが、かりに字幕なしでも《道化師》のすごさは伝わります」

ファン憧れの歌い手、伸びゆく才能、俊英が勢揃いした。

旅芸人一座の座長・道化師カニオは笛田博昭。カニオの妻ネッダは竹多倫子。ネッダとひそかに愛し合っている若者シルヴィオは池内響。一座の色男ペッペは小堀勇介。一座の狂言回しでやはりネッダに気があるトニオは上江隼人。

昨今のイタリア・オペラ上演に欠かせないスター・テノール。抜群のステージ・プレゼンスを誇る歌姫。広上淳一との共演も増えてきたバリトン。ロッシーニなどベルカント・オペラのスペシャリスト。それに練達のキャリアを誇るバリトンの登場に胸ときめく。

「各地で共演しこの人は素晴らしいと思った方、それから僕が信頼する声楽家で宮崎での合唱指揮もお願いしている浅井隆仁さん推薦の方をお願いしました。今後の声楽界を担う方ばかり。最高でしょう。合唱は東京音楽大学と杉並児童合唱団です。母校の学生たちにも羽ばたいて欲しいと思っています」。

一瞬にして聴き手をヴェリズモ・オペラの世界に誘う、オーケストラの劇的な序奏が、強くてしなやかなカンタービレが早くも聴こえてくるかのよう。オペラは、「道化師」の生き様を語るトニオの口上で始まる。

旅芸人一座の到着に喝采をおくる村人たち(コーラス)。壮麗な管弦楽。主役陣たちの愛すべきアリアに情熱的な二重唱。このオペラの看板アリア、カニオの「衣装をつける」。やがて起こる悲劇を際立たせる美しい間奏曲。歓声に導かれ芝居の幕が上がり、劇中劇から本物の悲劇へ。「喜劇は終わりました」の台詞、オーケストラによる壮絶なエンディングまで、聴きどころは尽きない。